

「観光大国への成長はツーリズム産業が担う」(田川会長)

東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年が明けました。本誌では新春を飾るスペシャルトークとして、東京2020大会の招致活動に貢献するとともに、自身もプラトリアスロン競技でのメダル獲得を目指す谷真海選手と田川博己JATA会長による対談を企画しました。お二人に大会の開催意義や旅行業界が果たすべき役割について大いに語り合っていました。

東京2020大会への期待

ラグビーの盛り上がり
東京2020につなげる

原田 ロンドン2012大会が開催された英国では、2012年

に3100万人だった訪英外国人旅行者数が4000万人を超えるまでになったことも踏まえ、東京2020大会も見据えて、2020年への期待と抱負をお聞かせください。

田川 前回の東京大会が開催された1964年は日本人の渡航が自由化された年でもありましたが、昨年は海外旅行者数が2000万人に達する見通しで、今年は「海外旅行新時代」の幕開けとも言えます。2025

●田川博己会長



田川博己会長 理解深める場に

年の大阪・関西万博も視野に入れると、世界に向けて日本をどう見せていくか、「おもてなし」や「文化」を十二分に発信できたらラグビーワールドカップの雰囲気も東京2020大会につなげていきたいというのが、私の思いです。

ファシリテーター／原田宗彦
早稲田大学スポーツ科学学術院教授

1954年大阪生まれ。ペンシルバニア州立大学健康・体育・レクリエーション学部博士課程修了。鹿屋体育大学大学院教授などを経て、2005年から早稲田大学スポーツ科学学術院教授。一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構代表理事も務める。



パラリンピックを通じて変化を

原田 パラアスリートとしての立場から、東京2020大会にはどのようなことを期待されますか。

谷 ロンドン2012大会では、開催前から「パラリンピック競技のチケットは売り切れ」という情報を聞いていましたけれども、実際に現地へ行ってみたら会場は連日満員で「本当にこんなパラリンピックが出来るんだ」と感動しました。人種や国籍、言語の違いや障がいの有無に関わらず、多くの老



谷 真海さん & 「共生社会」へ

東京2020大会でもパラリンピックを大成功させることができたなら、「さすが、日本」と成熟社会として認知を高めてもらえるのではないかと考えています。競技会場の内外で民族や国籍、言語の違い、

あるいは、障がいのある無を問わず、全ての人たちが心の通う対話ができたら、日本がさらなる成熟社会に向けて前進していくチャンスになるはずです。

旅行業界に期待される役割 意識変革を進めるプロセスの検討も

原田 東京2020大会を通じて、旅行業界が学ぶべきポイントなどについては、どのようにお考えになりますか。

●谷 真海さん(パラトライアスロン選手) 1982年生まれ。宮城県気仙沼市出身。早稲田大学入学とともに入部した応援部チアリーダーズで活躍していた2001年冬、骨肉腫を発症し、2002年4月に右足膝下を切断し、義足生活に。2003年1月からスポーツを再開し、2004年から走幅跳で3大会連続パラリンピック出場。2013年のIOC総会では、プレゼンターとしてスピーチを行い、東京2020大会の誘致に貢献。2016年にはパラトライアスロンへの転向を表明し、2020年東京パラリンピックを目指す。サントリーホールディングスCSR推進部に勤務。

原田 スポーツツーリズム、あるいは、ユニバーサルツーリズムという観点から、東京2020大会の開催意義をどうお考えになりますか。

田川 旅行業界としては、多くの人々が旅をする、ツーリズムに

若男女が足を運んで一堂に会することは、心の中にある様々なバリアを取り除いてくれるはずです。

度目の開催となるパラリンピックの意義をどのように考えますか。

東京2020大会の開催意義

「共生社会の実現」という理念

原田 世界で初めて同一都市で2

もともと、「共生社会の実現」ということが謳われています。英国でもロンドン大会を契機に障がい者雇用率が格段にアップしました。

原田 スポーツツーリズム、あるいは、ユニバーサルツーリズムという観点から、東京2020大会の開催意義をどうお考えになりますか。

田川 旅行業界としては、多くの人々が旅をする、ツーリズムに

「様々な人々が尊重し合える社会の実現を」(谷 真海さん)

原田 世界で初めて同一都市で2

民全体にそういう気付きの機会を与えるということでも大変に大きな意味を持つと思いますが、ツーリズム産業や旅行業界としても、今回のパラリンピックを通じて、意識の変革が進むプロセスを検討したり、議論を深める取り組みも進めていく必要があると考えています。

大切なのは自然体での対応

原田 パラアスリートとして、あるいは、ご自身の旅行体験なども踏まえて、旅行業界には、どのようなことを期待されますか。

谷 ロンドン大会は大成を取めた大会として評価されています



谷選手「パラリンピックを気付きの機会に」



田川会長「ユニバーサル」をレガシーに」

けれども、街中は歴史が古いだけに、必ずしも公共施設や公共機関などでバリアフリー化が十分に進んでいるわけではないのに、周りの人たちがさりげなくサポートしてくれるので、自分自身でも苦勞したり嫌な思いをしたりすることがありませんでした。逆に、ロンドンに対する好感度が上がる結果をもたらしたようです。東京2020大会で、パラアスリートたちがどんどん街中へ出ていくと、市民の皆さんによる気付きも増えるでしょうし、旅行業界の皆さんにも、そういう気付きの機会としてパラリンピックを捉えていただけると嬉しいと思います。法

律やルールがどうかというよりも、自然体での対応を根付かせることが大切なのではないでしょうか。

アクション&レガシー

ユニバーサルデザインを提示

原田 2021年以降の持続的なツーリズムの発展に向けて、東京2020大会でどのようなレガシーの実現を望みますか。

田川 ツーリズム全体の発展にとつて、現在のキーワードは国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」であり、環境と平和の問題が最大のテーマです。ツーリズム自体が環境と平和の上に成り立っていると考えると、思います。「観光先進国」から「観光大国」への成長は、ツーリズム産業や旅行業界が担わなければなりません。人の心を豊かにして、旅に出てもらったり、旅に來てもらうということが、日本にとつても、ツーリズムにとつても、財産になつていくと思います。JATAも主催団体の一つである「ツーリズムEXPOジャパン」は、今年、

沖縄で開催されますけれども、2021年に東京へ戻ってきた時に、ツーリズムにおけるユニバーサルデザインというものを示す必要があると思っており、それがツーリズムにとつての東京2020大会のレガシーになると考えています。

「ダイバーシティ」をレガシーに

原田 パラアスリートとして、東京2020大会のレガシーをどのように想定されていますか。

谷 一言でいうと、「真のダイバーシティ社会の実現」ということになると思います。未来をつくっていく若者や子ども達に大会を体感してもらい、障がいのある人が日本に沢山来るのを見て、視野を広げて欲しいと考えています。お互いを尊重してリスペクトし合えることが最も大切であり、そういう意識が若者や子ども達の中にも変わっていくのなら、社会の意識がします。「共生」や「ダイバーシティ」がレガシーとなっていくことを大いに期待しています。